# 小児のオノマトペ使用の発達変化と難聴児への評価視点の検討

佐藤綾華*、大原重洋
聖隷クリストファー大学

【目的】

オノマトペは、主に聴覚を通じて学習されるため、難聴児には、自然な習得が難しく、学童期の高度な文章表現に支障をきたしている。本研究では、聴児のオノマトペ使用の発達と関連要因を明らかにし、難聴児例の評価手法を検討する。

【対象と方法】

対象は、小学 2～6 年生の聴児 22 名、難聴児 4 名(補聴器２名、人工内耳２名)であった。対象児には、PVT-R 絵画語い発達検査の実施およびオノマトペを 1 語ずつ提示し、それを含んだ短文を作成し、記載するよう求めた（計 24 題)。

結果は、オノマトペの使用が適切であれば 1 点加えて総得点を算出し、「適切さ」として分析を行った。さらに、1 文に使用されている単語数の平均を求め、「単語数」についても分析した。聴児の結果について、低学年、高学年の 2 群で「適切さ」、「単語数」を比較し(Wilcoxon 順位和検定)、生活月齢、語彙月齢(PVT-R)の関与を検討した(単回帰分析)。さらに、難聴児の結果と比較した。

【結果】

聴児の「適切さ」の中央値(四分位範囲)は、低学年群で 16(15.0-19.0)、高学年群 23(21.0-23.0)、「単語数」は、低学年群 2.6(2.2-2.9)、高学年群 3.7(3.5-4.0)であり、いずれも、群間の差は有意であった($W=105.5$, $p<0.01$; $W=104$, $p<0.01$)。単回帰分析の結果、「適切さ」は、語彙月齢の関与を認めた($p<0.01$, $R^2=0.44$)。一方、「単語数」は、生活月齢による説明力が高かった（$p<0.01$, $R^2=0.31$)。難聴児の適切さは低学年群 10(8.5-13.3)、単語数は 1.29(1.09-1.89)であり、聴児の低学年群と比較して低下する傾向を示した($p=0.08$)。

【考察】

オノマトペの習得には、語い発達が影響していることが示された。しかし、作文構成等の文中での高度なオノマトペの使用は、学年が上がるとともに向上することを指摘できる。難聴児は、健聴児と比べると成績の低下がみられ、音のイメージを言葉に結びつけることに難渋することが示唆された。